

くつもあります。私が住んでいた家の前も田んぼで、夏には蛙の大合唱という状態でした。分子研に来た当初、生後半年だった息子と、週末は公園で蛙と一緒に探したりして遊びながら育児ができたのは良い思い出です。また、夏には分子研

の屋上に上がって花火鑑賞もさせてもらいました。今は、遠い東北の地に移ってしまいましたが、岡崎市と分子研に恋しさを感じる今日この頃です。短い期間でしたが、研究だけではなく、人生における重要なことも多く教えて下さりました

古谷先生、いつも細やかなケアをして下さいました古谷研究室のメンバーの方々、装置開発室の方々、秘書の清水さんを含めた事務の方々、分子研で親しくして頂いた方々を含め、関わった全ての方にこの場を借りて感謝申し上げます。

BOOKレビュー

Conjugated Objects: Developments, Synthesis, and Applications

著書名 Atsushi Nagai (Institute For Molecular Science)

Koji Takagi (Nagoya Institute of Technology)

出版社 Pan Stanford

概要

Conjugated Objects: Development, Synthesis, and Application contains 17 chapters written by young researchers and contains current trends in π -conjugated systems for application in broad research areas such as design of unique pi-conjugation, catalysts, self-assembly, charge transfer complexes, liquid crystals, supramolecules, and nanostructures by using conjugated small and/or macro-objects organically or electrochemically. The book can be used as a textbook of basic learning by undergraduate and graduate students of chemistry, electrical and electronics engineering, and materials science and by supramolecular researchers in nanotechnology and biotechnology.



覽古考新08 | 1985年

あれはいつのことであったか、昭和36年以前のことであることは確かである。小谷先生から一寸来て下さいなと言われてお伴したのが神田の学生会館、そこにおられたのが森野先生、赤松先生、長倉先生、たしか井口さんはおられなかったような気がする。そこで傍聴したのが物性研は固い物性の研究所だから、柔かい物性の研究所を作ろうという計画の話だった。昭和39年秋に3年間の海外生活を終って北大に赴任した直後に分子研小委員会が作られ、それが間もなく学術会議の化研連の下のいわば公式な存在となって、分子研創設の計画が進められた。高エネルギー研という大物が前途をふさいでいてどうにもならなかった、苛立たしいしかし一方希望と期待に満ちた2-3年を経て、分子研の創設が決定する。同時に井口さんを室長とする創設準備室ができる。もっとも室員の数は室長を含めて三人位だったか。その頃から人事委員会なるものができて、学生会や、東京ステーションホテル、やがて古い図書館が一つしかなかった現岡崎国立共同研究機構の敷地でのその建物の中で何十回となく(そう感じられた)会議が開かれて、そのうちに分子研誕生。その分子研が誕生してもう今年10周年を迎えようとしている。分子研小委員会から分子研誕生まで、私は何らかの形で創設の動きに関係していたようである。その分子研に2年間客員教官として在籍したということは、評点は落第であっても自分としては一種の感慨を持たざるを得ない。

井口さんからいただく年賀状に、例年のように「人は城、人は石垣、人は壕」という趣旨のことが書き添えられている。まことにその通りだと思う。いかに十分に研究設備が備い、費用が潤沢であっても良い研究者がいなければろくな研究は出来ない。良い研究者がいれば、たとえ設備が貧弱で費用が不足がちであっても(もちろん両方共よい条件であることに越したことはないが)良い研究は生れうるであろう。

今後も分子研外野応援団の一人として、分子研の確実な足どり、大きな飛躍をできるだけ長く眺めていきたいものだと念願している。

分子研レターズ No.13 「客員教官の任期を終るにあたって」(1985年)

大野公男(北海道大学教授)※

※ 2017年7月に逝去されました。永年温かく見守って下さりありがとうございました。